

## 佐多稲子「樹影」

— 色彩を拒否した画家と華僑の女性との十年間 —

伊佐木 有子

この作品は、華僑という立場であることから、まわりのものに対して、自己防衛することが自然に身にしみこみ、また、年老いた父親と二人の妹たちとの家庭の中で、生計の上でも一家の中心にならざるを得なかった柳慶子、病弱でありながら体内のどこにあるようなエネルギーが隠されているのか不思議に思われるほどの強き女性——慶子と、終戦前までの八年間、中央のD展に毎年入選しており、戦後も病魔と常に相対しながら、自分の精神、肉体、そして自分を取り巻く生活のしがらみの中に重ねて来た年輪、その彼の内煮沸するものを、血を吐くおもいで産み出そうとした画家麻田晋との間の恋愛の、長崎を舞台にした十年間の、深く重い歴史が、綴られたものように思われる。

この作品が、ただ単に男と女の恋愛の一つのケースを扱っただけのものに終らず、読み手に忘れられない、また忘れてはならない何かを印象づけるのは、複雑きわまる社会を背景に、たとえば、戦争という全く不合理で、人間を無視した事件、そして終戦、そこから派生する人間に加えられる苦しみをかかえこみながら、必死に生活する人間達の中の一ひとりということを原点にして、佐多稲子が産み出したものであるからではなからうか。

終戦と同時に人々は、戦争の余韻が漂っているにもかかわらず、とにかくその中で、歩き出さねばならなかった。精神的にも肉体的にも戦争のかけりを負うて、しかし、時の流れの中で、明日に向かって生活しなければならなかった。

悲惨な戦争が終って三年目、柳慶子も、そして麻田晋も、そういう人々と同じように、それぞれの生活を立て直そうとしている。慶子は、新しい茶房に、麻田晋は、「自分というものが、どこまで仕事の上で伸ばされ得るのか、それはこれからかかっている。」（「樹影」P22）と述べているように、自分の仕事も自由も、また生きのびることさえ、自分の力では確定できなかった長くて暗い時代が終った時、慶子の店の設計をひき受け、それを機に、絵画に自分の情熱を打ち込もうとしている。この二人の出会いには、まさしく、「これからなのだ」という生きる情熱と、不安、気負いの入り混った中でのものであったようだ。

麻田晋は、革新政党のボスターの労働者を描いても、勇ましさが求められるにもかかわらず、戦闘的な労働者は描けない。抒情性の

ふくまれた、理智的な柔かさの中にリリカルなもののあるのが、彼の絵である。そういう彼に慶子がひかれていくのは、控えて常に他人との間に距離を置くけれども、自分の店の事は、いっさい自分が取りしきらなければ気がすまないというような勝気な彼女が、「柳慶子にとって麻田晋は、彼女の生活の中でかつて出会わなかった型の人間であった。慶子は、男からこれほどいざわば対等に接されたこともなかったようだ。女感覚にだけはつきり感じられる男というものの、女に対する男くさい優越を麻田は持っていないかった。それは、慶子の女らしい感じ方と同時に、華僑としての潜在意識を刺戟されないということでもあったのはたしかである。」(「樹影」p. 10) という麻田に出合ったところにはじまる。一家を支えねばならなかったという事情からでもあるが、彼女は、主体性を持つ女性である。

蘆溝橋事件の起った時、長崎でも華僑のほとんどの家から一人は検挙され、慶子の家でも父親の柳明が留置された。そして華僑は戦時中ずっと、長崎の街から外へ出ることを禁じられた。しかし、そういう事情にもかかわらず、慶子は、自分達の苦しみは、戦争という事態により日本人の生活に加えられた苦しさとも同じであったと感ずる。幼少の頃から、華僑という立場ゆえに、はっきりと意識しないまでも自然にまわりに対し彼女自身ある卑屈さを宿してはいたけれども、日本人と同じ状況の中では、差別意識よりも、戦争という巨大な力で否応なしに人間に与えられる辛さのほうが先行し、暗く、苦しい時代を共に乗り越えてきたという同僚意識を持つようになっていた。慶子は、麻田の前でそれを打ち出そうとしている。

しかし、麻田が慶子に、「みんな、やなぎさんと呼んでますね。そ

れでよかですか。音読みにすれば、りゅうさんだが、正確にはどう発音するのか。」(「樹影」p. 10) と、彼女の姓の呼び方を聞いた時、慶子は気持の上でちよつと身構えて一歩身をすざらせてしまふのだった。

慶子は、店も軌道にのってこれからという時に、肺浸潤という診断で、二年間の療養を課せられた。麻田晋もまた、暗くて長かった戦争が終り、これから自分らしい生活をと躍動した矢先に、慶子と同じ病名の診断で自分の安静を言い渡される。偶然とはいえ、生きる支えをやつと見出したこの二人の人間にとっては、これほどの挫折感がほかにあろうか。麻田、慶子、この二人は、ただ単に時の流れの中に身をゆだねて生きようとする人間ではない。それぞれの生活意識を持ち、自分の情熱を自分の仕事に、または自分の芸術にぶつけて生きようとする人間であると私は思う。

とくに麻田晋にとっては、それは今までの自分の歴史の中に味わったことのないものであった。身体の弱弱のために意欲のすべての中断を否応もなしに認めるしかない人間の苦悩と孤独、その中に育まれてゆく恋愛というのは、確かに逃避であり、錯覚であると、私は観念的には考える。しかし、ではどういう形の、どういう出会いの恋愛が、本物であるかと自問してみても、今の私には明確な答えは出せない。自分の前向きの意識にもかかわらず、神のいたずらか、病魔に襲われ、一時的にも、自分の仕事の中断を余儀なくされた人間の、仕事への、そして自分の妻子に対する責任への焦燥というものは、まぬがれ得ないものであろう。そういう時、人間であれば誰かに救いの手をさしのべてもらいたいのは、自然のことではな

いだらうか。それは、人間の弱さであり、哀れさであらうとも。慶子と麻田の間にたゆたうものが、男と女の牽引だということは、もちろんである。しかし、それに加えて、同病相憐むといった自分達の置かれた状態ゆえに、現実への顧慮よりも自分達の間流れる同質の虚無感や挫折感、疎外感のほうが優先して、自分達のエゴの合一へと走ったのも自然であつたと言えないだらうか。

麻田晋と柳慶子の間が、愛し合うということではっきりした時の慶子の心の動きは、まさしく純粋に恋をしている女性の動き方であるように思われる。

日本人の中の華僑であるという立場ゆえに、そして自分が一家を支えねばならなかつたという事情から、今までにほんとうに自分を主張するということのなかつた慶子は、麻田との恋愛においては、まわりの人間達の思惑も中傷も、特に、麻田の背後にある家庭さえも認識の外へ置こうとする。そして、店の主人としての彼女自身の生活の上に立って、芸術家としての麻田といわば対等に恋愛を育てていこうとする。これは今まで彼女の内に潜められていた強さのあらわれであり、彼女の脱皮であり、また十年という長い月日、彼女の愛が続いた原因にもなるものではないだらうか。

彼らの恋愛の始まりは、自分達の暗い現実からの逃避とも思えないくもないが、しかし、彼らは恋愛の中で、お互いの存在をなんとか良いエッセンスとして、生きていこうとする。麻田は、「おたがい、誰にも知られぬ秘密の世界を持っていることは、高貴におもえる。」と慶子に言ったことに自己嫌悪し、そういう自分の甘さが自分の絵にしのびよるにちがいないと苦惱する。また、世間への常識に

対してではなく、家庭を持つ自分と慶子との間の責任に対して苦しむ。

「彼は、自分もし病気でなかつたなら、この解決をしただらうかと考えて、そんな素早い転身のできぬ自分を感した。これはしかし人間というものかもしれないと、どこかで自分を許すおもいがある。人間の成長の過程で何かの具体的な契機というものがあるなら、慶子との恋をそのような性格の上でとらえる、ということが大事なのだということに思いを据えるしかなかった。」〔樹影〕P53)

これは考えようによっては、男性の身勝手さとも、無責任さとも、そして弱さとも言える麻田の心の動きであるが、彼自身は、彼らの恋愛をただ単に、逃避ではなくて、生きるばねと実感していること、その実感の上に立ってのみ自己を許容し得ていることを示しているのではないだらうか。

麻田は、絵を描くことの中に自分の情熱をぶつつけようとする。何かを産み出そうとするプロセスには、行きづまりや、劣等感がつきまとうものである。彼は、慶子との恋の純粋性を信じながらも、生活のしがらみの中で、そして、体力的に弱りつつある自分を、外から眺めることにより、無意識のうちに、現実に対して、自分に対して、抗いながらも、どんどん虚無的になっていく。彼は、虚無的な腹に包みこまれながらも、必死に生き続けようとする。

慶子は、麻田との恋愛をきっかけに、過去の歴史から負わされていた華僑ゆえの卑屈さを認識し、さらに登録証明書を常に持ち歩かねばならないという事から、戦争終了後も依然として変らない日本

における華僑の立場、それに比して、はつきりした独立国民としての歩みをはじめた中共への強い関心、という風に、社会に対する問題意識をどんどん上げていく。

それは、彼女自身の内部における華僑意識からの脱却にとどまらず、むしろ麻田との恋を支えにして生きていく生命感の昂揚ゆえに、彼女が社会に対して視野を拡げ、自分達、華僑の存在を、そして彼女自身をも、積極的に主張していこうとする姿である、と私は思う。

麻田との恋がもたらす彼女のまわりの人達の波動を、決して陰湿に受けとめず、そういう生活のしがらみに対して、抵抗し、その中で、彼女自身が、社会に向かって目を開き、成長していくプロセスこそは、彼女の本来の姿であり、しかしそれは恋愛によって生み出される女性の真実ではないだろうか。彼らの恋愛は、決して頹廢的なものではない。柳慶子という女性は、恋愛により破滅していく人間ではない。むしろ、自分も、そして相手をも、生きさせるだけの情熱と強さを持つ女性である、と私は思う。

慶子は、麻田との関係が世間的には正常でないことへの女らしい不満を持って、「とにかく、あなたは、今のままで画が描けるとですわ。わからんわ」(「樹影」p.83)と言う。麻田が二人の恋愛を生きた支えにしていることを彼女も自覚しているのに、その上で、彼が、絵にすがって自分の生きる道をつかもうとすることに對して羨望する。

「秘密に言えば、君の云うとおりかもしれない。しかし、先ず仕事をしなければ、どうしようもなかとやる。僕がそう云うのは、

僕たちの関係を頹廢的にしたくないからさ。仕事をすれば、その頹廢から救われるとおもわんね。」  
「あなたは、それでよかでしょう。わたしは、何にすがればよかかしら。」

「僕の絵ではいかんね」「それはそうやけど、わたし自身のものですよ。あなたが絵にすがっていられるように、わたしもわたしの生きていくというはつきりしたものが欲しかとですよ。わたしが、華僑の在り方ということを考えるのは、そのためよ。

華僑として生まれ育ったわたしの現実が……」(「樹影」p.83)  
慶子は、自分達の恋愛が世間的に正常でないという表面の事実に対して、彼らの恋愛の純粋性を保つために、そして、麻田が自分の成長を希むのと同様に、彼女も自意識を育てようとする。それゆえに、彼女は、華僑の問題に取り組もうとする。彼女の社会への意識の底には、過去から彼女の中に潜在していた華僑としての生活の中からじみ出た卑屈感がある。彼女は、麻田との恋を契機に、彼女達華僑の卑屈感を解体して、新しい華僑としての意識を育てねばならないのだと感じ始める。それは、彼女の意識のめざましい成長である。しかし、彼女自身もそういう自分の心情をまだ明確に言葉に表現できないでいる。彼女がそうであるから、麻田にも彼女の心意がはつきりつかめないのは、当然であろう。麻田は、自分の決断力の無さから、慶子を陰の立場においたままであることが、彼女の心理の線を複雑にしているのだとおもう。

華僑という存在については、日本人にも、また彼女達、中国人側にも、人種的偏見がある。そういう生活の中で、彼女の内に蓄積された感情の屈折は、麻田にも把握できていない。それは、慶子との

間に恋愛によって通じ合う心があるにもかかわらず、別々の生活を営んでいるからであろうか。それとも、また、麻田も自分自身、創作というかかえこめぬほどの苦しさのともなう仕事、自分の体力の衰え、現実への責任、といった慶子にもはっきり把握できない苦悩を持っていたからであろうか。

慶子は、自分の父親の顔に貧しさと差別の堆積により今日に至った八十歳の年齢を見る時、華僑という閉ざされた環境にいて諦めのまま老衰した者に対する切なさを感じると同時に、自分の周囲の同胞が、自分達の立場の確立と認識を深めることを避けているということに苛立ち、それが、思想的な面では共鳴してくれても、実際の生活では、麻田にも理解できないことであることに、孤独を感じる。

しかし慶子は、麻田が彼女に対しては何らの偏見を持っていないということを知るから、麻田との間の微妙なゆきちがいを正そうとしない。確かに、彼女には、麻田が彼女に対して偏見を持っていないという事実だけで十分であろう。恋する相手に、それ以上を求め、それ以上の説明をする必要はないであろう。恋愛というペールに包みこまれている男女は、お互いに相手を傷つけることを恐れるものである。

麻田と慶子は、自分達の恋愛のもたらす、まわりの者達への波動の中で、自分達の関係を正常にする術も見出せぬままに、それゆえに、お互いに、自分自身の病気の悪化を無視して、慶子は、一家を支えねばならぬ責任と、華僑の意識の変革への問題意識を拓げることにより、そして麻田は、慶子との恋をいつかは、正常な形にできるだけの余裕を持てるだろうという希みからくる生活のしがらみ

の中で、意欲の裏返し焦燥、不満、自己嫌悪と戦いながら生活を押しすすめ、独自の絵を産み出そうとする。それは、二人の現実への痛々しいほどの必死の抵抗ではないだろうか。

慶子が、二人の部屋として切実になっている小屋に、家から蒲団を運ぼうとした時、妹にとがめられる箇所がある。妹の意見を拒み通したそのあとの彼女の心理の動き方は、彼女の我の強さも手伝うけれど、愛する人間を持ち、自分達の恋の世界と、自分の立場を必死に保とうとする女性の姿ではないだろうか。

「妹に見破られて一瞬自分の慌てたのが、口惜しい。妹の前などに自分の秘めごとでぼろを出したくない。妹の本能的な直感などで自分達のことには触れられたくない。」(「樹影」P.21)

麻田には妻子があるから、彼との仲をあくまでも秘めねばならないということ、長い月日の流れの中の麻田とのつながりの中で、慶子が心得てきた、彼女の自負心につながるものである。まわりの人達に日常生活の二人の隠した姿の線が浮び上らないはずはない。慶子自身も、それに気づいていないはずがない。しかし、彼女は、自分の支えねばならない家族や、自分が経営している茶房を、しっかりきりまわしていくことで、そして、麻田との関係において対等な立場を、表面上作り上げているのだと自負することによって、せめての救いを、そこに求めようとしているのではないだろうか。秘めねばならぬ恋愛において、女性の内に潜む悲哀や孤独感は、並み並みならぬものであろう。

慶子が、麻田にはすがって生きられる絵というものがある、と羨望するのは、彼女の内に常に、麻田との恋愛において、ある時は、彼の家庭に対して、また、ある時は、現実の慶子のまわりに対して

嫉妬や息苦しきを感じ、そういう、うっ積した感じを吐き出す場のないことが、原因の一つになっているのではないだろうか。

麻田が、慶子に向かって仕事に対する苦悩を打つつける場面が、数多く出てくる。その時慶子は、彼の苦悩を受けとめながら、彼は、自分の情熱の注ぎこめる絵という、つまり、彼がすがって生きるものの中で、単一に苦悩していると、羨望を感じる。そして、「彼には日本人は、と言ふ必要はない」(「樹影」p.38)と感ずる。

この彼女の心理は、何なのだろうか。

彼女の意識の向かっている華僑の問題に対して、具体的に彼女の取るべき行動も、また、考え方も固まっていない。ただ現状維持では駄目だという焦燥と、麻田との恋の突破口のない行く末に対する彼女の虚無感、悲哀、そういうものからくる心理であろう、と私は推察する。

麻田は、徐々に身体の調子が悪化していく中で、死の予感にふっと襲われる。そして、慶子との逢引きのあと、「おれは今朝、ふっと死ぬような気がした」と慶子に話す。麻田も慶子も、日常生活のしがらみの中で、自分達の力でさえどうしようもない、正常でない恋愛ゆえに生じる、相互の感情のすれあい、そして病弱ゆえに重なる疲労の蓄積の渦の中で、苦しむ。

しかし、麻田の身体の中から力が脱けて、思考力さえ失われていくような状態は、慶子との秘めなければならぬ恋愛、そしてそれから派生する生活の重さからくるだけのものではあつたであらうか。慶子は、麻田の精神、肉体の悪化を自分に引きつけて考える。それは、慶子の麻田を労わる優しさであるが、麻田が、慶子が意識を拡

げていこうとする華僑の問題に対する彼女の気持を、把握できていないのと同じように、慶子も、死の予感にとりつかれるに至つた麻田の精神状態を把握していないように思われる。

戦後十三年目に、麻田の手首に紫斑が出た。慶子も麻田も、今まで二人の恋から生じる苦痛を、生きていられればこそ、と言つた風にとらえ、十三年前の長崎の痛恨を自分達の病弱の上に合わせておもうことはなかつた。それぞれ生活の苦痛に、あえてお互いの病身な状態をうわのせすることを意識的に避けてきた、ということであつたであろう。それは、日常生活のお互いの感情のゆれあいの中で、唯一の相手に対する優しさであり、自責の念からくることであつたであろう。

麻田は、原爆投下の翌日から連日、まるで憑かれたようになって長崎の街を歩きまわっている。しかも、工場で作る砲身の焼きを入れるために潰ける菜種油で何度か揚物をして食べた記憶がある。その油の上にも放射能は降りそそいでいたにちがいない。

長崎の夕映えに感動できない麻田の内には十三年前の原爆投下当時の悲惨と、それに自分が関わっていることへの恐怖と悲哀と、自分の内に潜む死の予感が、よみがえってくるのであろう。

私は、この二人を見ながら、女性の内には観念的にはわかつていても、無意識のうちに、恋愛により生じる不安や虚無感の中にどっぷりつかり、相手に対する愛情ゆえに、視野の狭い、相手を縛りつける、つまり前にどんどん進んでいく生命力よりもむしろ、暗い、暗い、重い死界へ導く感情が、何パーセントかあるような気がす

る。女性には、確かに前進よりも、衰退でもよい、とにかく、相手を自分の手の中にかかえこんで、自分達の世界に閉じこもろうとする意識があるのではないだろうか。

麻田が、死の予感の中に身を沈めつつも、なおも絵に情熱を注ぎ、生きていく意識を確かめようともがいている時、慶子の感情の動きには、女性らしい我執の狭さが現われているように思われる。それは、長い月日の流れの中で、相手への無意識の女性の感情の動き方であろうか、麻田との愛の関係の正常ではないということが、彼女の麻田に対する配慮を欠く原因になったのであろうか。時の流れというものは、恐ろしいものである。その中で蓄積されていった恋愛の辛さから来る感情は、人間の内面で、何よりも優先する。しかし、麻田同様、病弱な身体を引きずって生活する女性慶子のそのような感情を、誰も責めることはできないであらう。

終戦になったその次の日に、慶子は、上の妹と二人で炎天の中を爆心地を突っ切って、聖フランシスコ病院の近くの知人の倉庫にあずけてあった荷物を、取りに行っている。その慶子の身体に生じた斑点を何でもないと軽く一蹴する麻田も、我意的である、と私は思う。しかし、それは、自分の内に、何かの拍子に吹き上がってきそうな恐怖をねじ伏せようとするからであらう。自分に内にある恐怖を、相手の内に見た時、つまり、同じ危機感を持つとわかった者が、相手をいたわる言葉よりも、相手の危機感を否定する言葉しか吐けないのは、人間の本質的な利己心からであらうか。相手の危機感から目をそむけたい、といった心理は、人間の内に確かにある。

その時の麻田の心理の底には、慶子に対する愛情は根底にあっても、自分の身体の悪化、日常生活から派生する重さ、何にもまして、無意識のうちに色彩の無い世界にひきずりこまれる虚無的な精神状態への、彼の挑戦といってよい抗いの意識があったのではないだろうか。

麻田と慶子の恋愛の始まりから十年目に、麻田は、肝硬変という診断を医師から出される。そういう状態で、麻田は、慶子にも黙って、五十号の絵を描いている。それは、

「二本の細い立木が前面に二本、そして背後に一本、つまり三本が全体に白と灰色だけを使ってその濃淡で描いてあった。立木は、横にまっすぐぐに数本の枝を張っていたが、葉は描かれていず、三本とも枯木のように見えた。」〔樹影〕P212〕  
とある。

「社会全体が、敗戦の荒廃を抱えながらも大きく動いていた時期に、彼は自分のすべてを静止の状態におかねばならなかった。そんなときに慶子という相手を持ってしまったことは、自分にとっては、生きていく証しでもあったと彼はおもう。彼はたしかに、そこがすがっていたが、そこに生じた表裏の葛藤は、自分の負わねばならないものであった。それは、秘めたことだから彼は、正直にやはり、明るくはなかった。」〔樹影〕P182～183〕

原爆のもたらす悲惨を体験し、直接自分にも影響しているのではないか、という疑いの中で、必死に生きつづけようとする彼の最後の絵に、色彩が無くなったのは、まさしく、人間の魂の孤独の叫び

であるように思えてならない。その彼の死界をのぞきこむような孤独感、慶子にも立ち入ることのできない、彼自身のものであろう。誰をも責める訳にはゆかぬものだが、色彩の無い絵が、彼の心象風景のあらわれだとするなら、人間とはなんと悲しく、孤独ないき物であらうか。

生きるために、また生きている証しとして絵に情熱を注ぎこんだ麻田晋なのに、生活のしがらみに耐えて、自分の病弱な身体に鞭うって、絵を描きつづけた彼なのに、最後に、色彩の無い絵を残して、そして、自分にも荷の重すぎた家庭を、また慶子をも案じながら原爆症でこの世を去る。色彩の無い絵を描かざる得なかつた彼の内には、まわりの人達に対する限りない優しさと、絶対量の自責の念とが、あつたのであろう。それゆえに、自分の肉体の弱りを、自分の内にくすぶり始めた死の予感を、口に出すことができなかつたのではあるまいか。「虚無的になつては敗北だ」とよく言つていた麻田であつたが、心の底にしみついた死の予感とそれともなう虚無感を絵の中に投影する以外に、方法がなかつたのであろう、「俺は立枯れて死んでゆく」(「樹影」P. 200)と。彼の内に深く根を張つた死への予感が、ほかの何も受けつけなかつたのであろう。

慶子は、麻田の死後、「木立」「樹骨」と題名のつけられた彼の遺作を直視した時、麻田同様、孤独と悲哀と自責の念の入り混じる世界につき落される。胸部疾患という身体で、「丈夫にならう」ということ以外に認識のなかつた二人の愛の始まり。そこには、弱められた精神と肉体を持つ人間のいたわり、愛情と、共に生きようとす、けなげさがあつたのではないだろうか。

十年の月日の流れの中で、慶子は麻田を支えて必死に生きてきた。それは、彼女の内に潜む情熱と強さゆえであらう。しかし、その彼女の我の強さは、ともすると、彼女自身も制御出来ぬ強い自己主張となつて、麻田に向かつてつきつけられる結果になつた。

女性にとつて、不安定な形の恋は、相手に対して愛情があればあるほど、苦痛のものであろう。慶子は、「家庭という形式の強さを知らなかつたのは自分の甘さだつた。」と、麻田に言つている。そういう言葉を吐く慶子の心理は、まさしく女性らしい動き方のように思われる。

麻田との恋から生じる苦痛のはけ口を見つけあぐねて、ひとりで、眠れぬ夜をすごす慶子の複雑な心理状態で、彼女に、麻田が色彩の無い絵を描かざる得なかつた絶対の孤独を把握しろというのは、神わざではなかつたらうか。

慶子の内に、華僑の問題が頭をもたげ、第二回原水爆禁止世界大会の時、中国代表団を長崎駅へ迎えに出た。その時、母国語を知らない彼女には、故国代表の挨拶も通訳を通してしか聞きとれない。だからと云つて、通訳の言葉の一区切毎に起る日本人の一斉の拍手にいっしょになることもできなかった。その時、彼女は、全く、宙に浮いている自分を見たのであろう。あの時の羞恥心と悲哀のまじつた感情が、あとあとまで彼女の内に残つていることも手伝つて、それに、麻田の死後の彼女の内の空洞を埋めるために、中国語を習い始める。それは、麻田とのつながりの中にも、常に彼女の意識と生活における華僑というものがあつたことを示している。

彼女が華僑としての社会的な意識を拵げて、具体的に外へ出て活

動し始めるきっかけが、麻田の死ということであるのは、悲しいけれど、彼女の内にある麻田との愛における自責の念が、彼女をじっとさせておかなかつたのであろう。「木立」「樹骨」という絵を残して死んだ麻田の心情を慶子が理解した時、彼女の内に吹き上がったものは、麻田が生きていた時の彼の内面の苦悩と同等のものであるう。

麻田との恋の十年間、慶子は、彼との恋愛により生じる自分の感情の波動の中で生きていた、と私は思う。彼女の社会への視野も、彼とのつながりの中で芽ばえ、育つたものと言えよう。しかし、彼女には、もう一步、具体的な行動ができなかつた。もう一步、具体的な行動に出る思考と精神的余裕が、彼女にはなかつた。それは、世間的に正常でない恋愛ゆえに、そこから派生する彼女の女性らしい重く、苦しい感情と、生活のしがらみがさせなかつたのであろう。しかし彼女は、決して恋愛により身を滅ぼしたという人間ではない。もし、そうであるならば、麻田の死後、彼女は、原爆症で死なねばならなかつた麻田を思い、自分もまた原爆者のひとりなのだという意識のために、そして、彼女の父親が、故郷のしきたりを忘れずに行うことで、福建省福清県への思いをまぎらし、六十年余の長崎生活を、三年期限つきの在留許可証を附された人間として終つたことへの、そしてそういう華僑の立場への苛立ちと悲哀のために、原水禁運動に加わり、日中友好の組織に加入するなどという事はしなかつたであらう。彼女は、自分の身体の衰退をねじ伏せて、故国を思い、平和を願い、社会運動に一途になる。それは、彼女の過去からの生活の中からにじみ出た、日本の中の華僑、彼女の内に潜む華僑ゆえの生活感情からのものであり、麻田が、原爆症で死んだ

ということがきっかけになつての彼女の行動なのである。

柳慶子は、麻田の死後、茶房の経営、平和活動に、自分の身体を悪化をねじ伏せて、必死に自己投企し、クモ腰下出血、という診断で、(脳の中に腫瘍があつたかもしれないという疑いを残して) ひとりの二階で、ひとりのまま死んだ。

慶子は、麻田に、「あなたが絵にすがつていられるように、わたしも、わたしの生きていくというはつきりしたものが、欲しかとですよ。わたしが、華僑の在り方ということを考えるのは、そのためよ。華僑として生まれ育つたわたしの現実が……」と、彼女の苛立ちをぶつつけていたものだ。

麻田の死後、まさに彼女は、人間の最も素朴な願いである世界平和のための活動という意識ゆえに、平和活動に身を投じることで、生きていく証しを見ていたのではないだろうか。麻田の死後、彼女の彼に対する自責の念、そして、十年間の彼との歴史を無駄にしないためにも、必死に平和活動に自己投企することで、そこにすがって生きたのではないだろうか。

「肌寒い秋の終りのこの日、柳慶子は、四十三歳の生涯をとじた。病弱な身体を情熱で引きずって生き、そして最後はまるで、爆竹を投げたように激しく弾きつけて一瞬に消えた。」

(「樹影」P.316)

麻田の内に蓄積されていった死の予感と身体の衰えを、彼女自身、はつきり理解しえなかつた、それは事実である。彼女の感情の枠内だけで、麻田を眺めるようになっていたのも事実だ。

「僕はずっと前から長崎のしつこい壁に魅かれとつたやろ。一

度は描こうとおもうとったが、今度はそのしつこい壁を背景にするよ。そこに男一人、女二人の人物を配置する構図を考えとるがね。しつこい壁は白、人物を、緑の濃淡で出して。全体に悲哀の感じを出したい。人物の組合せだが、とにかく、この三人とも同様に悲哀の感情を出したいとさ」(「樹影」P169)

と、麻田が慶子に話す箇所がある。それに対する慶子の反応ぶりは、次のようである。

「厭ねっ」「そんなの描くなんて。わたし、そんなテーマで描いてもらうの厭よね。そんなの現実曝露ですよ。誰かはすぐそんな絵、あなたの現実を見破るわよ。そして何と苦勞の多いこととおもうわよ。あなたも悲しき男ですか。わたしは厭ですよ。」

〔樹影〕P170)

彼女は、確かに自分の内に、常に渦巻いている不安定な形の窓から生じる辛さを爆発させている。主観で、彼女の立場から、麻田の描こうとする絵について、感情的になつてゐる。

しかし、彼の残した色彩の無い絵を見た時つまり、彼女にも入りこめぬ彼の絶対の孤独を理解した時、彼女の内に湧き上がってきたのは、彼に対する自責の念と、彼らの間にあつた愛の無力さである。十年間という月日、お互いは自分と相手との愛を疑はしなかつたのに、そういう関係をお互いに支えにしていたはずなのに、にもかかわらず、それとは全く無関係な孤独感を内に秘めて、この世を去つた麻田。残された慶子の内にも、麻田の色彩の無い絵の中にある彼の心象と同様の苦しさが、残つたであらう。

華僑として育つた彼女の内に潜む悲哀と、十年間の麻田との恋、そういう彼女の歴史の中からにじみ出る悲哀と孤独感、そして自責

の念を、慶子は、平和運動の中に必死にぶつつけたのだ、と私は思う。色彩のない絵を残して死んでいった麻田とは、対称的である。必死に生きつづけている、つまり平和運動に自己投企している途上で、彼女自身、意識するまもなく、まさしく、激しく弾きつけて一瞬に消えた、としか言いようがない。それは、彼女の内にある激しい情熱―何ものをも受けつけない彼女の強さを示している。

色彩を無くした画家麻田晋、華僑の女性柳慶子。この二人の恋愛から始まる、この「樹影」という作品を読んで、私は、必死に生きた人間の年輪の尊さ、そして愛の孤独を痛感している。この二人の間にあつたのは、世間的に正常でない恋愛ゆえに、そしてそこから派生する生活のしがらみの中で、お互いの内に生れた自責の念と、お互いをかばい合う優しさであつた。二人は、お互いの内にある恐怖や苛立ち、最も本質的な体力の衰えを自分の内にねじ伏せることによつて、愛の証しにしようとしたのではないだろうか。お互いの内にある恐怖と苛立ちと孤独感を、ひとりりで、じつと見据えて、じつと見据えることによつて、そういうものに対して無言のうちに立ちむかっている人間の姿が、私には想像される。麻田と慶子は、お互いの間の愛ゆえに、それぞれの内に、自分を真暗な闇の中でじつと見つめるもうひとりの自分を、育てていたのではないだろうか。

人間とは、生まれながらにして孤独な魂を持つてゐる、と私は思う。それゆえに愛を求め、愛を欲しながら、愛を手の中に受けとめながら、なお、孤独な魂は消滅しない。

麻田、慶子の生きた、彼らの歴史は、孤独な魂をそれぞれの内に宿しているけれど、それでも生きつづける人間の尊さを私に教えて

くれたようだ。

松原新一氏は、『樹影』の感動（群像、昭和四十八年、八月号）という評論で次のように述べている。

『樹影』の男女関係のありようから愛の不毛というふうな現代的な人間認識をひきだしてくることは、必ずしもむずかしいことではないわけだ。「虚無」と「孤独」こそが人間存在のどうしようもない条件だ、という認識がみちびきだされてきて、必ずしもおかしくはないわけだろう。しかし、もし『樹影』がそれだけの小説に終っていたとしたら、おそらく私は、『樹影』に深く心をゆりうごかされるというような読書経験をもつことはできなかっただろう、と思う。「人から人へ掛け渡す橋はない」とは、夏目漱石『行人』の「兄さん」を深い虚無の淵に追い込んだ、人間の孤独にかかわる嘆声にはかならなかった。しかし、漱石は漱石なりのやりかたにおいて（いうところの「則天去私」の立場の発見）そういう虚無的な人間認識をこえてでようとする志向を捨てなかった、ということこそ私は重要視したい、と思うのだ。『樹影』において、佐多氏は、佐多氏なりのやりかたにおいて、柳慶子を、いったんおちこんだ、絶望的といつてもいい荒涼とした心の状態から改めて立ち直らせようとしている、ということが、やはり私にとっては大切なことなのである。（中略）私は、人間の真実はネガティブなものなかに宿るといふ、従来の文学がくりかえし、くりかえし、明らかにしてきた人間認識に、一人間として全的に満足することができぬ。（中略）一個人の人としてニヒリズムが人間認識、

人生認識の究極的な真実だ、とは、どうしても考えられない。少くとも、そこに自足することができないという思いがある。むしろ、虚無の淵からはいあがるということは、口に出してあつさりいえるほど、簡単なことでも容易なことでもない。はいあがるうとしても、なおかつ、ひきずりもどすちからがあるからこそ、それは深淵と呼ばれもするのであろう。にもかかわらず、私の内部で虚無は、人間の語る究極の言語ではないという、ひそかな異議申立ての声がいっぱい吃音状態のようなもどかしさとともにせりあがってくる。（中略）『樹影』はやはり文学とおおしての、ひとつの強い励ましにはかならなかった。「虚無的になつては敗北だ」という、佐多氏の切実な声が作品の底からきこえてくるように思われたのだ。

また、渡辺澄子氏の「佐多稲子の『樹影』」（『文学的立場』8号）には、このような指摘がある。

『くれない』『歯車』を書いた佐多稲子である。どうしてワキ役であるこの妻の悲しみを己が悲しみとして表現しようとしたのか。作者の心情は、この妻を悲哀、苦痛に追いやる主人公の女性の側にある。佐多稲子は、かなしい女たちの代弁者であったはずである。（中略）確かに慶子も、「かなしい女」である。かといって、「かなしい女」慶子を描くことで、「かなしい女」邦子を、切り捨ててもよいものだろうか。（後略）

私は、『樹影』についての小論をまとめた後、右の松原新一、渡辺澄子氏の評論を読むことができ、はっとさせられた。私の視点は、社会的問題をかかえて生きた、柳慶子・麻田晋の十年間の生きたま

だけに絞られていて、麻田晋の妻である邦子については、全く掘り下げていない。柳慶子、麻田晋の十年間の歴史が、苦悩にみちたものであるならば、確かに妻である邦子の十年間も、彼らの苦悩と同等のものであったであろう。邦子は、ワキ役としてあっさりかたづけてしまいうわけにはいかぬ存在であろう。渡辺澄子氏は、この作品の盲点を鋭くついていると思う。なぜに、佐多稲子が、邦子の存在を深く掘り下げなかったか、私としても疑問であり、この作品についての今後の私の課題になりそうである。

#### 〔評〕

右の論文は、原題は「佐多稲子作品論―「くれなゐ」と「樹影」について」となっていた七〇枚から、その第二章「樹影」の部分四〇枚をとり出したものである。切り離すことは稿者の本意ではなかったと思うが、合意を得て、第一章を割愛した。

「くれなゐ」は作者の代表作の一つであり、主題の上からも「樹影」につながるものがある。その上、「くれなゐ」は稿者が佐多作品としては最初に読んだ印象の深いものという。したがって第一章において、作品に併せて作家佐多についての印象と評価がないまぜに論じられている形になっている。そのような第一章を前提とする第二章は、端的に、「樹影」についての鑑賞だけになっており、論文典型のいわゆる「結論」といったものもない。それだけかえって第二章だけを切り離し易かったとも言える。ただ、以上の点から、標題は、佐多稲子「樹影」―とすることにどめた。

「樹影」は比較的最近作であるため、参考論文としては、稿者が末尾にその要点を抜萃して付記としている二論がある程度と思う

が、それをも論文指導に当たった評者は、論文が提出されるまで、その存在を示さなかった。先入見なく作品に接する方がこの作品とこの稿者の場合にはよかるうと考えたからであるが、その当否は判者にしたがう。ただ、稿者は、それが何のハンディとならないばかりか、むしろ幸いであったと言えるほど、作者の意図と作品の文目とを適確にきめ細かく読みとっている。二人の男女主人公の置かれた複雑困難な位置、その間の愛情の昂揚と持続の経過、葛藤というには余りに微妙な愛情のずれ、芸術と社会的問題をかかえての生きざまなどを、作者の意図に寄り添って捉え得ている。しかも作者の描くところに対する同感にとどまらず、作者の分析・描写と、稿者自身の、現代の若者らしい生活体験との響き合いといってもよいような、いささか男女の愛情の機微を察し得たという感慨が吐露されているところが、そういうところが、とりわけ若い女性が小説を読むことの人生的意義といったものを、おのずからにして示すことになっていて、評者をうつ。

稿者の、平常の生活に立ち向かっている姿勢の真剣さ、それに伴う心情の纏綿といったものにやや触れ得たところから見ると、この「樹影」は、まさに読まれるべくして読まれたという感が深いのと編集者からは十分の余白を与えられたその責をふさぐためにもと、あえて「評」にはならぬ贅言を記した。

(天野 茂)